

『追っ手』

ケルマデイクの万神殿内にある孤児院に戻ってきて数日間、ポルメリアはかつてないほど寛いだ時間を過ごした。

いつもならば、ケルマデイクに留まるのは次の旅への準備が整うまでの中休みに過ぎなかった。

子供たちと遊ぶ事はあっても、悪名高き支配者たちや魔術師、強盗団などの情報を集め、武器を磨ぎ、地図を眺めて旅に備える事を怠りはしない。

だが今回は違った。最初にリュイーズと一緒に盗賊ギルドまで足を運び、彼女の仲間たちへの連絡を言付けると、後はずっと待機の状態が続いたのだ。ヤニース家の世継ぎとハガート家の当主という大貴族を暗殺した犯人を調べるなど、ポルメリアには荷の重い話だ。フォリヴァス宰相大公の側近であるリュイーズとその仲間たちが調べ終わるのを待つしかない。

ポルメリアは生真面目な娘だ。ただ待っているという状態はお好みではない。しかしだからといって彼女にできる事は何もなく、せいぜい愛剣と鎧の手入れをし、日課の素振りを繰り返すぐらいで、他は孤児院の子供たちとじゃれあう日々が続いた。

生まれてからこの方、ずっと張り詰めた人生を送ってきた彼女にとっては貴重な寛ぎの時間であつたに違いない。

しかしそれさえも生真面目な彼女には後ろめたい事と感じられた。

だから子供たちを寝かしつけた後、一緒に部屋で休んでいるリュイーズに嘯み付くのだ。

「今日の成果はどうでした？」

子供たちと思いつきり遊んで夕食を食べた後、決まってポルメリアは真剣な藍色の瞳をリュイーズに向ける。あまりに真剣な表情などでリュイーズなどは笑ってしまいそうになるのだが、

豊かな黒髪をベッドから垂らして寝そべりながら、生真面目な可愛い妹のようなポルメリアに答えるのだ。

「残念ながら、まだ」

「意外に時間のかかるものですね」

「そうね。あれだけの事をやってのける者は限られているけど、そういう者はあまり表に出てこない場合もある。全て調べようとしているから時間がかかるのかも」

「なんだか・・・もどかしいです」

「でもいい休暇じゃない。ポリーは真面目だから、次から次へと仕事を抱え込むそうじゃない。子供たちから聞いたよ」

人当たりのいいリュイーズは子供たちにも受けがいい。盗賊ギルドへ行つて情報を集めてくるとか、万神殿に届く郵便物に自分宛ての物がなくかどうか確認すると、彼女も暇を持て余す立場になる。そうになると、やはり子供たちの相手をする事になるのだろう。自然、彼らからポルメリアの話も聞く。

「子供たちはさ、ポリーにもっと遊んでもらいたいんだよ」

「それは私も嬉しいのですが、でもそればかりする事は、私には許されません」

「誰に？」

「天使の力を与えて下さった軍神に」

言われてリュイーズは先日戯れに素手で試合をした事を思い出した。

リュイーズは拳で戦うモンクである。武装を解いたポルメリアと戦うならば圧倒的に有利になる筈である。ところが子供たちを観客にして試合をしてみても、リュイーズははつきりと自覚した。

ポルメリアは自分とは次元が違う生き物なのだ。

リュイーズの拳は確かにポルメリアを捉えるが、見えない鎧のようなものがあつてダメージを与える事ができない。反対にポルメリアの拳は、なかなかリュイーズを捉える事ができないのだが、それでも当たれば重々しくダメージがくる。

こうなれば時間の問題だ。ポルメリアよりも体力の劣るリュイーズはいずれ彼女に打ち負けるだろう。

それが解つた時点で試合を止めた。子供たちには不評だったが、リュイーズは負けると解つた戦いなどしない主義だった。例え試合でも。

「軍神か。応えてくれない神さまが、そんなにありがたいのかな」

フオリヴァス宰相大公に仕えるリュイーズは大公の理想に共鳴し、

その手伝いに徹していると言いながら、やはり大公よりお褒めの言葉をいただき、褒美をもらう事に励みを持つ。

だがポルメリアの残酷な神は、力を与えながら目的を示さなかった。そして言葉をかける事もない。

生真面目な彼女は戸惑いながら自分のできる範囲で、その力を使わなければならない。そんな義務感だけで生きているようだ。

それがリュイーズには理解できないのだが、ポルメリアはさほど重くは考えなくなっているようだ。

「私は生まれながら神に捧げられた者。ありがたいとか、そういう事はあまり意味がないんです。

ちょうど私たちが人間の、女としてこの世に生まれた事と同じようなものです」

「そうなの？」

「そう考えるようになりました。それに神は無意味な事はなさらないでしょう。

いずれ私がこの力全てを使つて戦わなければならない時が訪れるのだと、神は予見されたのかも知れません」

「そうなのかな？」

「おそろしく」

そう思わなければポルメリアの人生は無意味になつてしまふだろう。そう理解しながらも、リュイーズは呟いた。

「でも、できる事なら、そんな事は起こつて欲しくないわね。私は普通の人間なんだから」

ポリーの力を最大限に解放しなきゃならない時なんて想像したくないわ」

それは地獄の釜の蓋でも開かなければ起こらないだろう。そんな過酷な世界なんて、リュイーズは願ひ下げだ。

そして、それはポルメリアの願ひでもあつた。

「この世界でそんな事になったら、私も悲しいです。できる事なら地獄に攻め入る軍勢の一員として、戦いに赴きたい」

「そんなこと、あるの？」

「魔術師の話によれば、テツラムリアの次元の外では、今も天使と悪魔の軍勢が幾多の世界で攻防を繰り返しているとか。もっと私力をつけてテツラムリアの外に出る事ができるようになったら、あるいは……」

「そんな事ができるようになるのかあ」

「……解りませんけどね」

少し自嘲気味にポルメリアが微笑む。

「……一度だけ、力を解放すべき時がありました」

「へえ……何時？」

「西方を荒らしまわった赤き巨龍と戦った時です」

「一人で？」

「いえ、仲間がいました。生まれて初めて仲間となった人たちでした。

彼らの為にも、私は最初から赤き巨龍に全てをぶつけていかなければならなかった。

ところが深手を負わせたものの、私は龍の顎に捕らえられ、鎧ごと噛み砕かれ、悶絶しました。

後で気がついた時には、そこに動く者は何一つありませんでした。龍も、そして仲間たちも……」

「……辛かったわね」

「……おのれの至らなさに腹が立ちました。それでも、救いはあるものです……」

「自分が生き延びた……じゃないわね」

ポルメリアの性格ならば仲間の為に真つ先に命を投げ出すだろう。

そうではなく自分一人だけが生き延びた事に後悔や後ろめたさを人一倍感じるのが彼女なのだ。

意外な事にポルメリアは苦笑気味に微笑んだ。

「一人だけ仲間が生きていたんです。もともと戦いの最中は逃げ出していたようです」

「ええ?!」

「……それでも生きていてさえいてくれれば、それでいいんです」

もしもリュウイズが仲間にそんな裏切り行為をされたなら、ポルメリアの様に微苦笑で済ませる事はできなかっただろう。だがポルメリアはあくまでも穏やかに微笑んでいた。本当に、その仲間が生きていてくれた事が嬉しかったに違いない。

リュウイズが少し意外に思っていたのは、『城砦落とし』ポルメリア・ランキンが考えていたよりも表情が豊かであるという事だ。旅先ではそうでもなかったが、子供たちと一緒にいる時は、よく笑う。声をあげて笑う。

もしも事情通の盗賊ギルドにそんな事を喋ったら、連中は変な顔をするに違いない。

それほど『城砦落とし』と笑顔は結びつかないものだった。

「貴女がそんな風に笑えるのだと解っていたなら、説教がましい事なんて言わなかったのに」

リュウイズはそんな事を呟いた。可憐な少女なのだからもつと笑えと、旅先で言った事を思い出したのだ。

「言われても仕方ないですよ。旅の間はいつでも臨戦態勢ですから。

本当はもつと気持ちにゆとりがあればいいのですけれども、私はどうも、そういう余裕がいつもなくて……」

ポルメリアの言葉を聞いてリュウイズは、もしかしたら彼女は天使の眷属である事に引け目を感じているのかも知れないと思った。普通の人とは違う自分を持って余して、後ろめたく思っているのだろう。他の人間ならば、天使に匹敵する力を誇りに思うだろうに。

「人並み以上の力を持つならば、もつと自信を持つてもいいと思うけどね」

「……人間的に未熟なんです」

「そういう事なのかな」

「そうなのだと思います。戦いの場数は踏んでいても、私はまだ十六にもなっていません」

人間以上の力を持つポルメリアのコンプレックスが経験のなさなのだ。リュウイズにしてみれば微笑みを禁じえない事だったが、ポルメリアにしてみれば切実なのかも知れない。力に見合った思慮が欲しい。なんと言っても彼女はまだ少女に過ぎないのだ。

だからリュウイズにしてみれば、こういつて慰めるより他にないのだ。

「大丈夫よ。歳なんてすぐ取るわ。子供頃は、なんて一年とは長いものだろうと思っていたけれど、近頃は流れるように月日が過ぎていくもの。ぼやぼやしていたら、あつという間にお婆さんになっちゃうわ」

「リュウにもそんな事を思った事がありましたか？」

「なんですぐに大人にならないんだろう、って思わない子供なんていないわ。

どちらにせよ、焦ったって焦らなくなつて歳は取るものだもの。深刻に考える事はないわよ」

「そうでしょうか」

「そんなもんなのよ。さあ、そろそろ寝ましょう。明日も子供たちの相手で大変よ」

自分たちの立場を履き違えたリュウイズの言葉にポルメリアは苦笑したが、しかし小さく返事をするだけにした。ヤニース家の嫡男とハガート家の当主を殺した犯人が特定されれば、また探索、追跡の旅が始まる。

今はそれまでに許された、ちよつとした骨休めに過ぎないのだ。

リュウイズが明りを消す。ポルメリアは闇をも見通す藍色の瞳で、薄汚れた漆喰の天井を見つめた。

明日も明後日も、その次の晩も、この天井を眺めて眠る事を、疚しさを覚えながらも願った。

彼は思い出していた。どうしてヤニース家の世継ぎやハガート家の当主を殺さなければならなかったのかを。

赤毛の少年が朗らかに言った。

「まずは彼女の目を貴方から逸らさないかね」

大貴族二人を殺す事が、どうして彼女の目を逸らす事になるのか？

「それはですねー、中原の大貴族間の勢力均衡が崩れて戦乱が起き易くなり、弱い者の味方である彼女としては、そういう大規模な戦闘を食い止めるべく奮闘しなきゃならなくなる訳で・・・まあ、いいじゃないですか。こんなところでウジウジ悶々としているよりは、ぶっ殺してぶっ倒して、スカッとした方が気分転換になりますよ、うん」
なんだか投げやりな説明であつたような気がする。

しかし、確かに豪華な貴賓室に閉じ籠つて悶々と悩むよりも、こうやって貴族の宮殿を調べ、侵入路を確保し、標的の貴族を殺していく事だけを考えているというのは、大変楽な事だつた。

かつての彼はこんな大それた事などしなかつた。目立たぬように危険を冒さず、最大級の利益を得る事が、その人生の目標だつた。

そして彼は、その望みを手に入れた・・・筈だつた。

貴族には貴賓として遇され、民衆には『英雄』と歎呼され、莫大な褒賞金を手に入れ、後は悠悠自適の人生を送るばかりだつた筈だ。

だがそれは、全て死に絶えた仲間の手柄を独り占めした結果だ。仲間が全て死んでいれば問題はなかつた。

だが一人だけ生き残つた者がいる。それも、『善なる軍神』に仕える正義の使徒という至極厄介な奴が。

今の自分を見つけ出し、その不正を訴える事のできるただ一人の存在。それが彼女だつた。

彼はどうあつても彼女に見つかる訳にはいかなかつた。彼女には自分から遠く離れてもらわなければならなかつた。

・・・できれば、遠い戦場で死んでもらいたい。そうなれば彼とはまったく無関係に彼女はこの世から消えて亡くなるのだから。

戦争の火種は十分ばらまいた筈だ。

中原で対立する貴族たちはハガート家の後継者争いで不安定になってきている。

世継ぎを失つたヤニース家も南方の雄オウルバインと連絡を密にしているらしい。

もう一押しが必要だと、赤毛の少年はぼざいた。

シヴァーズ家はかつて『天使王国』宰相を輩出した名門の家柄だ。北方諸侯にも影響力を持っている。

中原で支配している国は三力国しかなかつたが、それぞれが農業も商業も工業も栄えた大国だ。

これで一族が結束していたならフォリヴァス家に匹敵する勢力を持っただろうに、

いかんせん、幼弱な当主と強力な分家、そしてその分家と対立する有力家臣と内訌の種を孕んでいた。

もしここで幼い当主が死ねば、たちまちその均衡は崩壊する。子供は勿論、兄弟もいない当主には後継ぎがいない。血筋を重んじれば分家が後を継ぐだろう。しかし有力家臣はそれに不満で黙つてはいまい。

ハガートに続いてシヴァーズという有力諸侯が内紛状態になれば、中原の均衡は崩れ、必ず戦争になるだろう。

そうなれば彼女は彼の不正どころではなくなるのだ。

戦争で最も被害を受ける弱者を助ける為に、彼女はその『正義の』剣を振るわざるを得なくなるのだから。

シヴァーズの居城はヤニースやハガートと比べても潜入しやすかつた。奥まつた屋敷の屋根裏から中に侵入する。

事前に屋敷の構造は調べておいた。幼い当主の寝室は更に奥だ。

最近乳母と部屋を分けたばかりで、そろそろ独立心が芽生えてきた若君は、小うるさい乳母から離れて羽を伸ばしているらしい。

彼にとっては好都合だった。乳母は彼にとつても小うるさい存在だ。仕事をするのに不都合な存在だ。

天井を僅かにずらして中の様子を窺う。

出入り口の扉には不寝番の小姓がうたた寝と戦っている。中央のベッドには天蓋がなかった。

若君が邪魔だといって外してしまつたのだ。ベッドの上では貴顕とはいえ子供でしかない若君が壮絶な寝相で転がっている。そのせいで彼は危険を承知で体の位置を変えなければならなかった。

若君の首元が良く見える場所をとる。吹き矢を筒に仕込む。首元か胸元か。どちらでも構わなかった。

吹き矢の針に塗られたのは、猛毒だ。命が助かっても半身不随になつて一生涯、そのベッドから出る事はできないだろう。

彼は静かに矢を吹いた。しばらく後に少年は息が止まつたような、微かなうめきを上げた。それで不寝番の小姓が身動きする。

だが若君はベッドの上で横たまつたままだ。ぼんやりとそれを確認した小姓は、そのままうたた寝の心地よさに身を委ねてしまつた。

簡単なものだ。ほんの少し前まで、彼はこういう危険な仕事をするのが嫌で仕方なかった。

身の危険に対して過敏である事。それが生き延びる事の秘訣であると信じていた。

しかしどうだろう？これで三度、貴族の、

それもそこの諸侯が束になつても適わない名門の大貴族『七大公』の末裔達を三人も簡単に屠つてこられたのだ。

臆病になりすぎるのも考え物だと彼は笑つた。それはかつての彼を知る者からすれば、目にした事のない暗い笑みだった。

仕事を終えた彼は静かに去っていく。夜が明けて若君の異常に気付いたなら、

シヴァーズ家は蜂の巣を突付いたような騒ぎになるだろう。

それはそれで見物だろうが、しかしそんなものを見届けるような危険を冒すつもりは、さすがになかった。

結果は離れた場所においても見極められる。そう自分に言い聞かせて、彼は夜の闇に消えた。

そうやって身を隠す事こそ、彼の本業だった。

いつもの午後なら、リュイーズはやや落胆した様子で街から戻ってくる。だがその日は様子が違つていた。

子供たちの相手をしているポルメリアに向かつて無言で合図をする。

ポルメリアは子供たちに詫びを言いながらリュイーズの元へ向かった。

よほど重要な事が起こつたのか、リュイーズの顔は珍しく強張り、無言のまま竈や大地の女神の神殿から離れた。

彼女が辿りついたのは法と秩序の神を祀る神殿だった。権力者との結びつきの強い神殿で、

フォリヴァス家を始めとする大貴族とも懇意な関係を持っている。

リュイーズがフォリヴァスの印証を見せれば竈の女神の孤児院などよりも簡単に宿を貸してくれるような場所だ。

既に話は通していたらしく、リュイーズは閑静な小部屋に入った。ポルメリアもそれに続く。

リュイーズは静かに扉を閉めて、無表情のまま言った。

「悪い知らせと悪い知らせ。どちらかを先に聞きたい？」

「では、悪い方を」

用意周到に物事を進める性格のリュイーズが緊張している。よほど悪い事が起きたに違いない。

悪い事から知りたがるポルメリアも用心深い性格かも知れない。いい事ならば特に備える必要もないだろうから。

ポルメリアの言葉に、らしいと感じたのかりュイーズは少し微笑みを浮かべた。だがその笑みは話が始まった途端、消えた。「シヴァーズ家の幼主、セシル殿が殺されたわ」

セシル・シヴァーズは十歳にも満たない子供の筈である。ポルメリアは唇を噛んだ。

「刃物で心臓を刺されたのですか？」

今までヤニースとハガートの犠牲者は鋭利な刃物で心臓を刺されている。だが今回は違った。

「いいえ。吹き矢に毒が塗られていたわ。あいにく毒に詳しい医師か魔術師が居合わせなくて、どんな毒が使われたのかは不明。吹き矢も盗賊ギルドや暗殺者ギルドの関係者なら苦もなく手に入れられるものよ。」

同一犯かどうかは解らない。けれども動機なら同じものが見えてくる。

ともかく、シヴァーズ家は真つ二つに割れたわ。

本家の補佐をしていた分家当主を後継に推す者と、

それと対立して同じシヴァーズ一族でも北方諸侯の一つフェルザー侯を推す者に。

そして当然の如くヤニースがフォリヴァスを非難し始めた」

「何故です？」

「殺された大貴族は、ヤニース、ハガート、シヴァーズの者。皆フォリヴァスと対立して反主流派を形成している者たちばかり。自派と対立する諸侯を殺し分裂の危機に追いやって、フォリヴァスは中原の覇権を握りたいのだろうと、大っぴらに言い始めた。

言われればそうなのよね。この状況はフォリヴァスの得にはなっても損にはならない」

苦笑したりュイーズにポルメリアは思わず問うた。

「まさか、今までの犯人探しは全て狂言ですか？」

「違うわ。こんなあからさままで短絡的な事をすれば、敵はおるか味方だった諸侯までフォリヴァスから離れていく。

余人はともかく宰相大公閣下は、こんな事をするぐらいならとつとと戦端を開いた方がマシだとお考えになる方よ。」

確かに状況は有利かもしれない。けれどもすぐにそうでもなくなるわ。ヤニースは南方の雄オウルバインと手を組んでいるのよ。それにシヴァーズのフェルザー侯を支持する有力家臣たちはヤニースと同調している。この意味は解るでしょう？」

フェルザー侯爵は、北方でも比較的中原に近い南に領国を持っている諸侯だ。

単独の力なら、更に北方に位置するランキン侯爵にもかなわないが、しかし中原に近い諸侯とは関係が深い。

『天使王国』時代の貴族のヒエラルヒーを基準にすれば、宰相を輩出したシヴァーズ家の影響力は例え分家でも侮れない。

もしもフェルザー侯とそれと同調する北方南部の諸侯が連合してヤニースと手を組めば、中原を押さえるフォリヴァス家は南北に挟まれる事になる。

「それにハガート家でも、私たちがのんびりしている間に事態が動き始めてしまった。

どうやらシデイス殿を支持する一派がヤニース家と接触を開始したらしい。

どうせヤニース側が積極的に取り込んできたのでしようけど、フォリヴァスを南北の諸侯で挟み撃ちにできると囁かれて、その気になったんでしょうね。逆にマルース殿はフォリヴァスに接近しているそうよ」

顔をしかめながらも淡々とリュイーズは報告する。聞く限りではフォリヴァス家は圧倒的に不利だというのに。

ポルメリアは思わず尋ねた。

「ここまで事態が進んでしまったなら、犯人探しは中止ですか？リュウ、貴女も宰相大公殿の下へ急がなければ・・・」

だがリュイーズは意外な事に、ポルメリアの顔を見て明るく微笑み返した。

「やあねえ。今となつては、本当に戦を止める事ができるのは私たちの働き次第なのよ。

フォリヴァス家の身の潔白を証明し、真犯人を見つけた事ができたなら、ヤニース側は戦の口実を失うわ。

逆に、フォリヴァスが主導権を握り、真犯人、そして黒幕を見つけて諸侯を結束させる事ができたなら、

それこそフォリヴァス家は他の諸侯に対して優位に立つことができる。

ポリー、政治の世界ではね、危機はある意味チャンスなのよ。それを克服すれば、一層強い立場を手に入れる事ができる」

「・・・そういうものなのですか？」

「そういうものなのよ。それに、私みたいな、戦場に立てば一兵卒でしかない者が帰還しても閣下にとっては何の助けにもならない。閣下の危機に際して、私ができる事はといえば、与えられた任務を成功させる事しか、ないのよ」

不意に声を落としたリュイーズの苦悩をポルメリアは見たとような気がした。

確かに、宰相大公側近とはいえ、平民出の彼女には経営する領土も部下もない。率いる兵は一人もない。

戦場に立ったなら本当に一人の兵士として戦わなければならない。そんな人間ならリュイーズの代わりにいくらでもいる。

そして彼女には連続暗殺事件の実行犯と黒幕を探し出す使命がある。

彼女にしてみれば敬愛する宰相大公の下に馳せ参じたいだろう。だがそれでは彼女はその他大勢と同じ働きしかできない。

犯人を探し出し、それを白日の下にさらし出せば、フォリヴァス家の危機を救い、

逆に諸侯を結束させ平和を取り戻すきっかけになるかもしれないのだ。

今の言葉は彼女自身が自分に言い聞かせている事なのだと、ポルメリアは理解した。

「それに、状況は最悪つて訳でもないのよ。フォリヴァス一族は危機に向かって結束を強めているし、

アカパイン、イルーク、キスリングといった大貴族たちはいずれもヤニースと対立関係にあるから、フォリヴァス側で立つしかない。

ハガートやシヴァーズも半分はこちら側よ。

中原では圧倒的にフォリヴァス側は優位に立っている。それだけじゃないわ。

東方の雄ウォレンサーは伝統的にフォリヴァスに近しいし、南方のオウルバインだって南に敵がいなわけじゃないもの。

北方のフェルザー侯に至つては、本当に北方諸侯をまとめられるかどうか解らないし、それに・・・」

「大丈夫ですよ、リュウ」

精一杯明るくしようと努力しているリュイーズがあまりにも痛々しくなつて、思わずポルメリアは彼女の両手をとった。

不意に、リュイーズの明るい仮面が剥がれ落ちる。彼女の黒い瞳は迷い子になった少女のように頼りなかった。

「・・・そう、かしら・・・」

思わずポルメリアはリュイーズを抱き寄せた。そして泣きじやくる子供達を慰めるように優しく背中を撫でてやった。

「大丈夫ですよ、リュウイズ・ポイントワ。私たちはきつと犯人を見つけます。」

そしてヤニースの人たちも誤解を解いてくれます。ハガートやシヴァーズの人たちの問題は、ゆっくりと解決策を見つけましょう。私たちがうまくやれば、きつと戦にはなりませんよ。

それに、もしも私たちがしくじっても、宰相大公殿なら、ちゃんとは対抗策を取られます。

それが、政治というものなのでしょう？」

リュウイズよりもやや背の低いポルメリアは、彼女から体を離して、その藍色の瞳に優しい光を湛えて彼女の黒い瞳を見つめた。

彼女の黒い瞳からは僅かに一滴の涙がこぼれていたが、しかしポルメリアの瞳に見上げられて、思わず笑みをこぼしていた。

「やだ。ポリー。いつもと逆ね」

「そうですか？」

ポルメリアは殊更不思議そうな顔をして見せた。

いつもなら悩んでいるのはポルメリアで、そんな彼女を励ますのがリュウイズなのに、今は反対になっている。

その事にポルメリアも気付いている筈なのに、彼女はとぼけているのだ。それがまたおかしくてリュウイズは声を立てて笑った。

「・・・不思議ね、ポリー。貴女はとつても不思議だわ」

「そうでしょうか？」

「しらばくつてちゃって・・・まあいいわ。ありがとぅ、ポルメリア・ランキン。もう大丈夫よ。もう大丈夫」

もしかしてポルメリア自身は気付いていない事かもしれないが、

もしかしたら、彼女は危険やトラブルになるほど冷静になっていくのかもしれない。そんな事をリュウイズはふと思いついた。

そうだ。彼女は善なる軍神の『兵士』なのだ。その力は悪き者たちとの戦いのみ、その威力を発揮する。

戦いのみ威力を発揮するのだ。だから彼女は平和の中で自らの力を持て余し、悩むのだが、

一度危機が、戦いが起これば一変する。彼女はその持てる力全てを使って戦いに没頭していくのだろう。

それは、なんて残酷な事なのだろうとリュウイズは思った。

こんなにも平和を、弱き人々の幸せを望み願い苦悩しているポルメリアなのに、彼女自身の居場所は戦いの中にしかないのだ。

その事に思い至ってしまったリュウイズは、ポルメリアを抱き締めてしまいそうになった。

彼女は、その小さな体一つで、戦いの中に身を投じる事でしか生きる事ができないのだから・・・

だがそれは、ポルメリアの言葉で思いとどまった。

「では、リュウ。今度は良い話を」

そうだ。話はまだ終わっていないかった。リュウイズは自分の感傷をひとまず傍らに置く事にした。

「そうね。そうだったわ。」

いい話というのは、ようやく犯人の候補者を選別し終えたということ。

盗賊ギルドや暗殺者ギルドの連中とは長い折衝で、ようやく言質が取れたわ。今回の暗殺に彼らは関わっていない。それだけの事を確認するのに、こんな時間がかかるなんて・・・まったく」

「それでは、ギルドに関わっている者の犯行ではないと？」

「そうとも限らないのよね。連中の構成員に対する拘束力なんて、たかが知れているのよ。

だから今回の暗殺はギルドを通しての話ではなく、依頼人が直接実行犯に話をつけたようなのよ。

あとはギルドが把握している中で、ヤニースとハガートの暗殺を実行できそうな者を選び出してもらったわ。・・・ずいぶんふんだくられたそうだけど、もしヤニースとフォリヴァスが全面戦争に突入したら、

ギルド存続も危ういって指摘してやったら素直になったって言ってたわ」

「・・・そついうものですか」

「盗賊はお人よしの大金持ちが多ければ多いほど商売になるのよ。そんなお金持ちなんて、平和になれば現れないし増えない。暗殺者ギルドは戦争になれば儲かるかも知れないけど、結局政治的立場をはつきりさせる事を迫られるわ。そりゃそつよね。

両陣営から等しく暗殺の仕事を請け負う事はできないもの。そして負け組になってしまつたらおしまいよ。

組織は潰され、野に潜らざるを得なくなる。

フリーなら問題ないかもしれないけど、窓口としてのギルドがなくなれば仕事は減るわね。

結局皆平和が一番儲かるのよ。

話を戻すけど、その後は結構協力的になったそうよ。自分たちの頭越して暗殺依頼なんかされたら面目丸潰れだもの。制裁の為に自分たちも暗殺犯を探すとか言っていたわ。探し出したら、また大金を要求されるのでしょうかね。

で、これが彼らの選び出した候補者よ。実行能力がある者は二十人あまり。

でもそのうちの十五人は裏が取れているわ。残りは、この五人よ」

ギルドが提供したリストは、彼らが最後に会った時の五人の様子をこと細かく書き出していた。描ける者は人相書きまで描かれている。

種族はさまざまだ。エルフ、小人族、人間・・・そして最後のリストに目を止めて、ポルメリアは息を飲んだ。

「どつしたの？」

リュイーズが心配そうにリストを覗きこむ。そこには人相書きのない、自己申告の経歴と名前だけが書かれていた。人間の青年。そして奇妙に印象が薄い。それが特長だと書かれていた。

「彼がどつしたの？心当たりでもあるの？」

リュイーズの質問に返ってきたポルメリアの言葉は呆然としたうわごとのようだった。

「ありえない・・・」

『クレドネエ』・・・どうしてそんな事がいえるの」

リストの名前を読み上げ、リュイーズの言葉が厳しくなった。しかしポルメリアは彼女を見ていない。リストから顔をあげて宙で何かを掴もうとするように視線を漂わせている。

「彼は・・・暗殺なんかできる人じゃない。いや、そんな事を請け負う理由もない・・・だって、彼は望みを叶えたんだもの・・・」

「ポリー。貴女、彼を知っているの？」

「・・・仲間だったんです。龍を専門に狩る旅の仲間・・・でも彼は莫大な褒賞金を手に入れた。財宝が彼の望みだった。いつだって危険から身を遠ざかるうとしていたのだから。」

「こんな、暗殺なんて仕事を、それも大貴族を殺す理由なんて、彼にはないんです。ないはずですよ！」

「ボルメリアは我を忘れたようにリュイーズに訴えかけた。だがリュイーズの言葉は冷たく、そして冷静だった。」

「詳しい話を聞かせてちょうだい。ボルメリア・ランキン卿」

自分が飲み込む息の音をボルメリアは聞いたような気がした。

そこにいるリュイーズは、親しげに話し掛けてくれた年上の女性ではなかった。

自分の主の状況を憂い悲しむ気弱な女性でもなかった。

そこにいるのは、フォリヴァス宰相大公の側近であり冷徹な意思を持つ調査官、リュイーズ・ポントワだった。

何かが壊れたような気配をボルメリアは感じた。

自分の中でなのか、それとも彼女の中でなのか。その時のボルメリアには解らなかった。